范蠡第論
幻住菴記

へ6
4471

幻住庵記

いしやまのおくいはまの
後ろに山有国分山と云
そのかみ国分寺の名を
つたふなるへし麓に
細き流を渡りて翠
微に登る事三曲二
百歩にして八幡宮立
玉ふ神体は弥陀の

芭蕉とのや唯一の家
まねてそるほこいむらはず
たとへ翁之をゆりくけ利
蒼はちらば用したまへし
まきまふとしはゆゑて
人は清きりなく然そいへく
かみうひまのあらはるに侍く
住捨しまのこあり あさ
根笹新をうごみえし猶あ
蘆荻く孤狸栖ならば
のちは幻住庵となづけし
の俳侍りし翁の弟子菅沼

曲水子は俳文にまなん
侍りきをいはれて八とせ計
むかしにふりぬて まさしく
幻住老人はなをみゝおは
ありこそや市中を住居
ことすともそうかゝりて
いそちやちらうとき 空
このむしの墓をとらし
なひかうつゆりいゑは都て
奥羽さくらの暑さ
はもおもひこうしぬる
すゝてあゆむへしき

かの海に七色よするハなほ
硯のかけし湖水の
ほとりに一切乃うき草
にかゝ神やあつる芦
の一もと北浜ちるのもしる
新潟蕨かき草結
ゆひふへる年として須磨
にゆいとかうの色に似
ちにやうくいてしまく
れもひろみ色さすうた
ちにものもとうす
つゝし咲のうら春待て

うきく浮まきも六
しらかりのはし宿ゝ行
にほりさん あつし床本つふ
乃つらしむいらしらんと
そうう無て 八説 並龍
東南ニ瀟湘 洞庭
洞庭に立ならひて来由
みそハをちら人ま絶とに
為ゝ小南葉も実とう
れ給へ 小風流をひらして
深し 月枝の出る乃
さる極まの幸浦にあはせて

千丈、うの宮、後、
山もの宮、ほのぼのと、
くもゐ、ぎをん、
みそそぎ、
作者、みそぎ、舞、
和歌、うたの、
後の宮、よそひのそう、
松の棚、代々、
ゆ、ゑ、
行法、業、
立藤宮、
王子、除、俗の徒、

昨晩雑炭山民ども到て
展転眠ず居候拍子
木こりの声を打て起す
早速くいまゝ行ハ
谷水清く流れて
炉ども焚て
一炉ハ海へいとうて
そこ〳〵に行き帰へ
ばこゝにいろ〳〵行
行くゝ命みを捨て
身形
て来る和尚つゝ

沙の蓋蓋社枕の上に
枕を掛けて置く
そのゆゑとしてこれを動と
なしてこれを
わのことを文事にいのそ
れ移ひあるべき免のまめ
なることなく和尚
なる農法は最上の
法なり枕を掛中にて
月を待くは新を見
物をしりくいもとや
よりそれをこうとなる

しるひるを用ゆ
をものみを野に出
ることをうく
ゆるあるべきゆ
ゆるなくしてい
ひ人よりくれ
ばつてこ
年月を移ること
なきもの
了ひて仕官懸命の
ひをこうやみあるべ
佛祖拈宮室ならず
いてもしるべ
こと風やこと
をやを免

をれ情を労して
暫く生涯のはかりことゝ
さへなれハ終に無能
無才にして此一筋
につなかる楽天ハ五
臓の神をやふり老杜ハ
痩たり賢愚文質の
ひとしからさるも
いつれか幻のすみかならす
やとおもひ捨て臥ぬ

先たのむ
椎の木もあり
夏木立

元禄三仲秋日
芭蕉桃青書